

北国で暮らす以上、雪や寒さは避けては通れない。しかし、約半年間にわたる冬は本当につらい季節なのだろうか？新しい角度から向き合い、楽しみ、芸術へと昇華させていく。その主人公が、遊びの天才である子供たちだ。経済優先で、物質至上主義の世の中であって、少々進路を見失っているが、冬の遊びの中から将来の日本のあるべき姿が見えてくる。

鼎談

雪と遊び、冬を楽しく



寒地技術に関する
シンポジウムが国内外で定着

東：北国の冬は寒さと雪のため厳しいものがありますが、北海道で暮らす以上、現実と向き合っていかなければなりません。こうした厳しい気象条件というデメリットを、発想を変えてメリットにする必要があると考えております。そこで寒地技術などの冬季に関するシンポジウムを数多く開催し、また、北方圏の方々と交流も深い北海道開発技術センターの佐々木副会長と、雪氷学の専門家であり、雪と土に親しむ北の生活館の館長で、元北海道大学低温科学研究所所長の秋田谷先生のお二人に「雪に親しみ、遊び、冬を楽しむ」について、お話を伺いたいと考えております。まず最初に佐々木先生からお願いします。

佐々木：北海道に住む我々にとって厳しい冬は避けては通れません。その中で冬を克服し、冬の生活を快適なものとするための工夫や研究開発が進められ、今日まで来ているわけですが、そういう中であって、私ども北海道開発技術センターとしてはオールジャパン・レベルの学会とはひと味違った、誰でも参加して情報交換や交流のできる場をつくりたいと考え、1985年11月に第1回の「寒地技術シンポジウム」を札幌で開催しました。このシンポジウムでは100余編の論文発表があり予想以上の成功を収めることができました。それ以降、今年で12回続いています。

さらに話は前後しますが、寒地開発に関する国際的な情報交換と交流の場をつくりたいという願望が以前からありまして、1983年に第1回の「寒地開発に関する国際シンポジウム」を札幌で開催しています。この時はフィンランド、ノルウェー、スウェーデン、中国、アメリカ、カナダと日本の7カ国が参加しました。第2回を1988年に中国黒竜江省ハルビン、続いてカナダのエドモントン、フィンランドのヘルシンキの隣町エスポーで、今年の5月には第5回目の会議が米国のアンカレッジで行われました。次回は2000年にオーストラリアのタスマニアを予定しています。

1994年には「国際寒地開発研究協会」という国際組織が設立されまして、当初私どもの希望でありました国内はもとより、国際的な情報交換の場をつくるのが実現、定着したと考えています。

北海道のよさを見直し、自然との共生を問う

秋田谷：国内の寒地技術シンポジウムは私も出席させていただいてますが、消費者協会の方たちやまちおこしの青年たちなど、学会とはあまり縁のない人たちが

同じところで発表するというのに、とても意義があると思います。国なり道なり行政機関や地方自治体が雪問題を扱っていても、実際にその恩恵をうける一般の人たちがどのようなことを考えているか、なかなか接点がないというのが実情ですから。

たしかに、北海道は寒冷地というデメリットはありますが、地球上の平均から見るとむしろいいほうだと思います。どの地域の自然環境でもいい点もあれば、悪い点もある。それに合った生活をすればいいんです。「自然との共生」という方向に世の中の目は向いていますが、経済活動では自然に逆らうことが起こります。だから雪が降っても、大雨が降っても、台風が来ても、決まった時間に出勤して決まった仕事をして、商品なら何月何日何時に市場に届かなければならないと考えてしまいます。東京や大阪ではふだんは雪が降りませんが、雪の降る日本海側や関ヶ原の峠を經由して物資



佐々木 晴美
副会長
(社)北海道開発技術センター

を輸送しますので、雪の装備がない車は当然到着が遅れ、そうすると苦情がくる。そこで夏タイヤでも走れるようにと峠に凍結防止剤を撒くんです。日本は雨が多いからすぐ流れていくので、環境に影響しないという人もいますが、それが本当なのかどうかはわかりません。一方、北海道は冬に対する心構えや経験があるので、雪問題については対処しやすいのですが、それでも冬になると嫌だなと思ってしまいます。

昔は雪が降ったら遅れるのが当たり前でしたが、今は定時に着くのが当たり前という風潮があります。現在、自然との共生が問われるのは、このまま発展していくと、地球全体がいろいろな意味で限界に近づくのではと真剣に心配されているからなのでしょう。

東：戦後、札幌市内の幹線道路から始まった除雪も、関係機関等の努力により、今では住宅地の道路まで除雪が行われるようになりました。寒地技術シンポジウムなどでは、やはり本州から見たハンディキャップを克服するという話題が多かったのではないのでしょうか。

佐々木：おっしゃる通りです。したがって、冬の克服に関するテーマの分科会に多くの論文が寄せられています。

秋田谷先生が会長になっておられる「雪を考える会」では雪中キャンプを行っているということですが、ファミリーが参加し、お互いの交流を深め、雪や寒さを体感することによって科学する心を見いだしていく機会をつくるということは、大変にすばらしい試みだと思います。

子供は冬の自然を体験することで成長する

東：冬をマイナスイメージとしてではなくプラス思考で考えると、雪国には限りなく魅力的なファクターが内包されているのではないのでしょうか。

秋田谷：雪景色というものは、雪国で育った人は気がつかないんですが、雪のないところから来た人はすぐ



秋田谷 英次
雪と土に親しむ北の生活館 館長

く感動します。また、新潟出身の学生が雪は濡れるから嫌なイメージを持っていたそうですが、「北海道の雪は濡れないのでいい」といわれると「なるほど」と思う。北海道にばかりいると気がつかないんですね。

夏は北海道も本州なみに30度を越えますが「暑いけど晩になったら眠れるね」とか「冬はあたり一面真っ白で素晴らしい」と北海道へ来た人がいう。そういう話を聞くと、当然自然だから厳しい面もあるが、いい面もあるんだと改めて認識するわけです。

「雪を考える会」では夏季キャンプと冬季キャンプを同じ場所で行っています。そうすることで夏のよさ、冬のよさを身をもって知り、冬じゃないと全できない遊びもあれば、その反対もわかる。そこで感動するとか、辛い目に合うとか人生にとって重要な経験ができるんです。だから、いろいろなことを子供に体験させて、自然の厳しさやすばらしさを身を持って知る機会を与えてやりたい。寒いのは何故だろうと考えたり、雪の結晶も観察できる。そうすると心も豊かでタフな

人間になってくれるはずですよ。

私は子供たちと一緒に何十回もキャンプをして、子供はやはり遊びの天才だということを教わりました。すぐに仲間をつくって、何も道具がなくてもルールを考えて遊ぶ。その晩泊まる雪の家を大人が作ったら、子供たちが「僕らも一緒に作りたかった」というので家作りをさせる。そういう能力があるから、ある程度は放っておくことも必要なんです。

1月から3月にかけて各市町村の行事を見るとほとんどが雪まつりみたいな行事で、しかも多くの参加者は受身的です。それもいいけれど、もっと気軽に、天気がよさそうだから自分たちで何かをしようという主体的な行動が必要だと思います。身近なところにただ除雪がされていて、トイレが完備されていれば冬でもキャンプを楽しむことができます。昔はスキーも今みたいじゃなくて竹スキーとか、あとは尻すべり。ふだんは行けない畑の中を歩いて暗くなるまで遊び、濡れたのがカチカチにしばれて最後には母親に叱られる。つまり、子供の遊びも主体性があり、親子のふれ合いもちゃんとあった。今の世の中、モノは豊かになったけれども、暮らしそのものというか人生そのものが豊かになっているかどうかは、ちょっと疑問ですね。

東：私たちの子供の頃と比べ、遊びのチャンスは増えてきていると思います。これから、冬の遊びあるいは楽しみ方をいかに過ごすかが必要となってくるのではないのでしょうか。

佐々木：これからは冬の遊びをどうやって昇華していくか、次元を高めていくかということに力点を置いて考えていく必要があるんじゃないかと思うんです。冬の遊びやレジャーから文化、芸術といったものを新たな発想で生み出していくという方向です。イベントで雪像や氷像を作るわけですが、その中から北海道の風土に根ざした芸術家が輩出してることが望まれています。北海道東海大学の谷山先生が試みておられるのですが、木枠に布をかけて水を散布して凍結させると、いろいろな形の模様がついた灯籠ができるんです。冬の遊びというものを、もう少し芸術性を持ったものへ移行させる試みだと思います。冬の遊びを文化、芸術のレベルまで昇華させることが大事ですね。

秋田谷：同感です。やはり遊びそのものは本来創造的で主体的なものだと思うんです。遊びの物理的環境は昔に比べればはるかに整っていますが、遊び心がなくなってきました。また、遊びというのは遊びを通じての人と人との付き合い方、これは危険、この辺まではいいとか、遊びの中で子供が喧嘩することによって、これ以上のことをしてはいけないとか、そういうことを学ぶことでもあるんです。それが、最近はお金を払

ってイベント屋さんやゲーム機器に遊ばせてもらってる。創造性と主体性のない遊びになった、そんな気がしてなりません。

佐々木：子供たちの遊び心や科学する心を刺激して、苦しいことにぶつかったらそれを克服することも学ばせ、人間的に成長する機会を与えることが望ましいと思います。人格を高め、つきつめると日本という国の文化も高まっていくのではないのでしょうか。

世界のコーディネーターを国家的目標に

東：遊びの中からルールを学ぶ。遊びが、子供たちの成長に影響を与えているんですね。

秋田谷：一番問題なのは、大人に遊び心がなくなったことです。自然との共生は自然に逆らわない、自然を活用した生き方ですが、効率を優先すると自然とは無関係に経済活動をする必要があります。それじゃあ遊び心なんていってられません。

以前、冬にカナダの知り合いのところへ行ったら「今日は天気がいいから湖の周辺を、歩くスキーで回ろう」というんです。アメリカでもそうでした。日本だったらお客さんが来ると、例えば観光地に連れて行っておいしいものを食べさせ、それがおもてなしみたいなのところがありますが、カナダやアメリカでは、お弁当を作って子供も一緒に連れて行く。それが文化なんです。私は遊びの文化も日本はこのままではいけないと思ったんです。日本ではお土産屋があってスピーカーで音楽が鳴っている観光地じゃないと、レクリエーションとかレジャーを楽しんだという気にならない人が多いようですね。

佐々木：日本人の観光旅行も非常に多様化というか、変化してきていると思います。私は、時々野幌森林公園に散歩に行き、森の中にあるお気に入りの小さなログハウスの喫茶店に寄ってコーヒーを飲んで帰ってくるんです。そこには、いろいろな自然保護のグループが出している会報誌があって、国内外の旅行情報が載っています。例えばカナディアンロッキーの花を見に行くツアーとかアルプスの自然を見る企画とか。一方、旅行代理店の人の話を聞くと例えば美術館だけを見て歩くツアーもあるそうですね。いわゆる名所旧跡ではなくて、もっと専門化、多様化した、あるいは自然を求めたツーリズムに変わってきているようで、好ましい傾向じゃないかと見ているんです。

秋田谷：ただ、ヒマラヤでトレッキングのお年寄りのグループが雪崩で数名亡くなっていますが、自然に親しむとはいっても危険はつきもので、欧米に比べると危機管理意識が不十分だと思います。

佐々木：私は今の日本には高い国家的目標がないのではと常々考えています。そこで、どのような目標を持つべきかですが、この国の歴史、総合国力、多元的価値を共存させるという日本独特の伝統的宗教感覚から考えて、国際社会における利害関係の調整役：コーディネーターだと思うんです。各界各層の人々が、国際的な活動のコーディネーターの役割を果たすという動きが、日本国中に広がっていくことが望まれるわけです。政府も、総合国力を高める中で、このような動きをバックにコーディネーター外交を展開すれば、世界の平和にも貢献することになり、また、日本のすべての分野の人々や将来を担う青少年に共通の目標と勇気を与えることになるのではないかというのが私の持論です。

冬の寒さと雪、氷に接する中での心身の錬磨、冬の遊びが造形を芸術のレベルまで高めることへのチャレ



東 紀夫
 (財)北海道道路管理技術センター 参与

ンジ精神、雪中キャンプのような冬の活動を通して交流の喜びの体験、世界的には決してマイナーな問題ではない冬の寒さと雪、氷、さらには積雪寒冷地域の開発、発展に関する国際的な活動の推進なども「世界のコーディネーター国家・日本」の実現に寄与するのではないかと思います。

秋田谷：私もそう思うんですが日本の文化というか国民性は、自己主張をすることが不得意なんですね。これからは雪の中での遊びから主体性や自己主張、さらに科学する心子供たちに芽生えさせたいと考えるわけです。子供たちの教育も日本にとってこれからの課題です。私は今までやってきた雪と親しむ、遊ぶ、そうすることで30年後の日本を担っていく子供たちの力に少しでもなりたいと思っています。

東：両先生から「遊びは人づくり」と遊びの原点についてのお話を聞かせていただきました。

本日はお忙しい中、長時間にわたりありがとうございました。